

## 2020 年度石本賞選考結果報告

「石本賞」選考作業部会長 岡田光弘

石本賞は、石本新氏のご遺族の寄付金をもとにした事業の一環として 2006 年度に創設されました。各年度一度、当該年度から遡って過去 3 年間に『科学哲学』に掲載された論文で、掲載決定時点で 40 歳未満である著者によるものの中から優秀な論文を一篇選び、その研究活動を支援・奨励することを目的としています。

これまでの受賞作は次の通りです。

- |      |        |  |
|------|--------|--|
| 第一回  | 青山 拓央  | 「時制的变化は定義可能か<br>ーマクタガートの洞察と失敗ー」  |
| 第二回  | 三平 正明  | 「フレーゲ：論理の普遍性とメタ体系的観点」  |
| 第三回  | 前田 高弘  | 「知覚経験の対象としての性質」  |
| 第四回  | 大塚 淳   | 「結局、機能とは何だったのか」  |
| 第五回  | 山田 圭一  | 「ウィトゲンシュタイン的文脈主義<br>ー壊れにくい知識モデルの構築をめざしてー」  |
| 第六回  | 小草 泰   | 「知覚の志向説と選言説」   |
| 第七回  | 佐金 武   | 「現在主義と時間の非対称性」   |
| 第八回  | 大西 勇喜謙 | 「認識論的観点からの実在論論争」   |
| 第九回  | 秋葉 剛史  | 「Truthmaker 原理はなぜ制限されるべきか」   |
| 第十回  | 細川 雄一郎 | 「反事実条件文推論の動態論理による形式化」  |
| 第十一回 | 北村 直彰  | 「存在論の方法としての Truthmaker 理論」   |
| 第十二回 | 榊原 英輔  | 「What Is Wrong with Interpretation Q? :<br>A Case of Concrete Skeptic's Interpretation of Algebra」 |
| 第十三回 | 鴻 浩介   | 「理由の内在主義と外在主義」   |
| 第十四回 | 李 太喜   | 「選択可能性と「自由論のドグマ」」  |

そして、今年度の受賞作は次に決定しました。

高谷 遼平 「主張内容を合成的に導く：一般合成性に基づく単純な意味論観の擁護  
(『科学哲学』52 巻 1 号掲載)

以下、この論文についての作業部会の評価を報告します。

合成的意味によって発話者の主張内容を理解するという、単純な合成的意味論観に対し、近年、否定的議論がなされてきました。高谷論文では、文脈と値踏みの状況を区別するカプラン流の二重指標意味論の枠組みをベースにして、文の意味論的値と主張内容が一致しない場合があるとする「同一性否定論証」の議論を厳密に分析したうえで、意味論に「言語環境」を付け加えるという、パギン=ウエスタートの「一般合成性」の考え方を採用すると、内包オペレータや量子子に関して論じられてきた「同一性否定論証」が回避できることを示しています。一般合成性概念の広範囲の適用可能性というパギン=ウエスタートの主張に対してそれを裏付ける成果となっており、同時に、合成的意味論の役割についての伝統的理解を擁護する主張となっています。

内包的表現に関するフレーゲの研究をその祖とみなして、表現の出現している環境に応じて意味論的値が変化するという立場から、それらを取り込んだ合成性としての「一般合成性」概念がパギン=ウエスタートらにより形式的に定式化されました。これらの先行研究では、内包的表現の広い範囲でこの考えが有効であるとの主張がなされてはいたものの、引用文などの具体例（これについてもフレーゲ自身も論じています）などの限られた例に対してのみ有効性が示されていました。一般合成的意味論を用いると同一性否定論証を回避できるという高谷論文の成果は、一般合成性概念の広範囲な有効性を示すものであり、意味論の合成性についての根本的考察への新たな契機を与えるものと言えます。

内包オペレータとしてではなく非内包的量子子として取り扱う場合は同一性否定論証を回避できるとするキングらの先行研究（例えば、always を量子子として取り扱う場合）についても、高谷氏は、同一性否定論証の論証構造からは逃れられていないことを示したうえで、他方で、「言語環境」を加える一般合成的意味論では、オペレータが現れる場合の同一性否定論証回避の議論構造が量子子の場合にも妥当することを指摘しています。同一性否定論証とその回避について、オペレータと量子子の両方の場合に議論構造の対応を示したことは、高く評価できます。

表現の出現する環境を持ち出す手法は、パギン=ウエスタートも強調しているようにフレーゲの間接的意味などの理論の延長線上とも言えますが、本高谷論文ではフレーゲに対するデイヴィドソンの批判を回避する道も言及されており、有意義で独自の議論になっています。

カプラン流の二重指標意味論に「言語環境」を付加することで、拡張された「合成的」意味と主張内容が一致するとみることを明らかにしていますが、ではそれがなぜ意味論の「合成性」と言えるのかについては、紙面の制約からか、短くまとめられているのみでした。「学習可能性論証」に依拠した一般合成性の正当化にとって「言語環境の有限性」が重要であるというパッケルンの議論に触れて、言語環境の有限性に対する短い補足が与えられています。また、カプラン流の二重指標意味論での「文脈」指標の付加も「合成性」と言われるか

ら、それと「類比的」に「言語環境」をさらに加えても「合成性」と言える、と述べられています。意味論の「合成性」とはなにかという問いにとって興味深い言及が並んでいますが、この拡張的「合成性」の意味論的「合成性」としての正当性については、さらなる展開の余地が残されているというコメントが委員から出されました。本論文の合成的意味論擁護の動機について著者は、擁護できなければ、「意味論的に決定される主張内容と語用論によるその拡張というグライス以来の描像を維持することが困難になる」からだと述べています。しかし、そもそも意味論/語用論を維持あるいは放棄するという問題性自体も重要であり、意味論の枠組み維持ということだけでは見失われる問題群もあると思われます。意味論/語用論問題も視野に入れた将来の研究も著者に期待したいという委員の意見もありました。

いくつか残された課題もあるものの、一般合成性の有効性を正面から検討すべく、同一性否定論証回避という課題に挑んで、厳密な分析を通じて、回避できることを示したという本論文の主要成果は、一般合成意味論分野全体にとって基盤的成果としての意義を持っていると言えますし、また、同一性否定論証の論証構造の明確化などいくつかの独創的捉え方や成果が示されていますので、本論文はこれらだけで十分に高く評価されるべきであるという結論になりました。

次に、選考の手順と経過を簡単に報告しておきます。今年度の石本賞対象論文総数は11篇であり、5月8日から1カ月間、編集委員会各委員に候補論文推薦を依頼しました。この編集委員会段階で推薦があった論文は6篇でした。この6篇の推薦論文決定後に、編集委員長が作業部会長を兼ねる4名からなる令和2年度石本賞作業部会を立ち上げ、選考作業を開始しました。作業部会内の協議と第1回目の投票結果により、4篇に絞り、これらが本年度石本賞最終ノミネート論文となりました。なお、最初の作業部会内協議で、既に石本賞の受賞歴を持つ著者の単著論文については、石本賞の趣旨に鑑み、その後選考に残さないこととしました。1回目投票は順位もコメントも付けずに、各委員が3篇を挙げる形で行ない、投票後に集計して上位4篇に絞りました。令和2年度石本賞最終選考にノミネートされた論文は次の4論文です。

石田知子 「「遺伝情報」はメタファーか」(自由応募論文:「科学哲学」52巻1号掲載)

木下頌子 「種名の指示の理論に基づく形而上学的方法論の評価—芸術作品の存在論を手がかりに」(若手研究助成成果報告:「科学哲学」52巻1号掲載)

高谷遼平 「主張内容を合成的に導く:一般合成性にに基づく単純な意味論観の擁護」(「科学哲学」(自由応募論文:「科学哲学」52巻1号掲載)

三木那由他 「「意図の無限後退問題とは何だったのか」(自由応募論文:「科学哲学」52巻1号掲載)

これらの論文 4 篇について、作業部会メンバーそれぞれが独立に順位付とその理由を付ける形式で、第 2 回の投票を行いました。投票後、順位を数値化して全員の評価結果を集計したうえで、作業部会メンバー全員で議論し総合評価を形成しました。この結果、作業部会として高谷論文を令和 2 年度石本賞に推薦することとなりました。

審査の過程で、高谷論文以外の 3 論文にも高いオリジナリティが確認できました。ただし、成果の完結度と論文の完成度という点において高谷論文が最も優れていると評価されました。なお、三木論文については、52 巻 1 号掲載決定以降に関連するテーマの著書を準備・出版されており、そこでは一段と高い完成度・完結度となったという指摘も作業部会委員からありましたが、石本賞の趣旨から対象論文のみを評価対象としました。最終ノミネート論文である三木論文、石田論文、木下論文は今回は石本賞に選ばれなかったものの、それぞれに対して高い評価・順位付けをした委員がおり、いずれも大きな発展の可能性をもつ研究であるという共通の認識を作業部会委員間で持ちました。

なお、編集委員会推薦 6 論文の著者のなかに作業部会長の所属していた大学院研究科出身者がいましたので、審査の公平性の検証の立場から、作業部会での 2 回の投票にあたっては部会委員 4 名全員と作業部会長を除いた 3 名の 2 つの集計を行ないました。2 回の投票のいずれの結果でも 4 名の結果と 3 名の結果に変わりはありませんでした。

本年度の石本賞作業部会メンバーは以下の 4 名でした。

岡田光弘(部会長)、金杉武司、清塚 邦彦、山田友幸